



## The White Company Way

社員がイキイキと喜んで働く「ホワイト企業」。そんな会社をつくるためには、経営者は何をすべきか——。ホワイト企業大賞企画委員長を務める天外伺朗氏が、社員の働きがいを重視するホワイト企業への道について語る。

# 社員が喜んで働く会社をつくる

天外塾主宰  
天外伺朗



昭和17年(1942年)、兵庫県生まれ。本名:土井利忠。元ソニー(株)上席常務。工学博士。ソニー勤務時代には、CDや犬型ロボットAIBOなどの開発を主導した。平成18年に同社を退職後、新企業経営論「人間性経営学」を樹立し、天外塾を主宰する。ホロボリック・ネットワーク代表。ホワイト企業大賞企画委員長。

## ブラック企業の逆は——

平成二十六年七月、未来工業(株)の創業者・山田昭男さんが逝去された。私は「天外塾」という経営塾を主宰しているが、二十三年から山田さんに講師をお願いして、三年にわたって毎年セミナー(月一回×三か月)を開催した。山田さんのユニークな経営哲学は、すでにマスコミやご本

人の著書を通じて広く知られていたが、実際にお話を伺うと「汲めども尽きず」という感があった。

その講義録と、私の解説や感想、塾生とのやり取りなどをまとめて『日本一労働時間が短い「超ホワイト企業」は利益率業界一! 山田昭男のリーダー学』(講談社)という本を二十六年四月に上梓した。巻頭言を山田さんご自身に書いていただいたが、その一部を抜粋する。

——(前略)二〇一四年三月三日、福岡で開かれた未来塾で、私は初めて「ホワイト企業」という言葉を使って講演した。「社員をひどい目に遭わせるブラック企業ばかりの世の中だけれども、ウチはブラックの逆だなあ。それなら「ホワイト」だ。そこで「よそとの差別化」と「社員のやる気を起こすこと」ができていくのが未来工業は「ホワイト企業」と名乗ることにしました」と話した。すると天外さんは、この本のタイトルに早速、「超ホワイト企業」と入れることにしたと聞いて、機を

見るに敏なことだなあ、と思った。  
(後略) —

山田さんは、社員に対して「お前たちはどうせ泥棒だろう」と言うなど口汚いところがあったのだが、その実「社長の役割は社員を感動させることだ」という考えのもとに、社員を喜ばせ、やる気がわくように、ありとあらゆる知恵を傾けてこられた。そのマネジメントが未来工業のユニークさを支えてきた。

### 山田昭男さんの遺志を継ぐ

「ホワイト企業」という言葉は、それ以前にも誰かが使っていたかもしれないが、おそらく山田さんの造語。二十六年三月に最初に口にされ、翌月発行される本のタイトルに私が採用し、そしてその三か月後に山田さんは亡くなった。

ご本人が主宰の未来塾でも、天外塾でも、山田さんが情熱を持って語ったのは、日本中の企業に未来工業のような「ホワイト企業」になっ  
てほしいという願いだった。



故・山田昭男氏  
(提供=未来工業(株))

二十六年八月、FM東京で山田昭男さんの追悼番組があり、私がゲストで呼ばれた。番組の冒頭で「ブラック企業大賞」の紹介があり、それと対比して、山田さんがいかに社員の幸せに配慮をした経営をしてきたかが、熱く語られた。

私は「ブラック企業大賞」の存在

を、その時初めて知った。過去に大手外食企業や大手電力会社が受賞したという。でも、おそらく授賞式をやっても受賞企業は誰も出席しないだろう、ちょっと空しいな……と思った。

番組が終わるころ、私は山田昭雄さんの遺志を継いで「ホワイト企業大賞」を推進することを決心していた。第一回目は一般の募集をせず、企画委員会で相談をして、受賞企業を未来工業とネットヨタ南国の二社に決めた。

「ホワイト企業」は「社員の幸せ、働きがい、社会貢献を大切にする企業」という、とてもシンプルな定義にとどめた。定義を厳密、詳細にし、項目が多くなると、応募企業はそれにとられることになる。それよりも、「ホワイト企業」という概念が、自由に発展してほしいという願いを込めたのだ。

翌年一月十七日の表彰式に向かつて怒涛の如く準備が進んだ。

(次号に続く)